通信第七十七号　アメリカ、新潟・法縁の旅

　七月三日から十六日にかけて、アメリカ（西海岸のカリフォルニア州サンマティオ本願寺派の寺院）・シリコンバレーに近いロスガトスのジネスト荒木佐恵子さま宅、そして二ューヨーク（東海岸）のゲーリーさん宅での本願道場のご縁を頂いてきました。

　このたびのご因縁は、ニューヨークにおられる開教使の名倉幹さんが米国仏教団総長の原田　マービンさんと会話をしている時に私の名前が出たそうです。マービンさんとは四十年以上前に京都でご縁がありました。藤谷秀道先生を紹介したことが印象に残っているとお聞きして、嬉しくなり連絡を取りました。お互いに「遇いたい」ということが一致して「きましょう」ということになりました。そこで「一つだけお願いがあります。観光よりも、御法座を開いてほしい。一人でも多くの念仏の人にお遇いしたいのです」と申し上げると「わかりました。七月上旬なら日程がとれます」とのことでした。今年の三月中旬に三重・岐阜本願道場に向かう新幹線の中でのメール交換から始まったことでした。

　なぜかすぐに思い立ったのは「マイウエイ」の歌を英語で歌わせて頂こう、二番の歌詞が良いから二番まで歌わせて頂こうと発起しました。早速、先生に連絡を取りお願いをしたところ引き受けてくださいました。「二番までですか」「はい」レッスンは月に三回で三カ月です。渡された原文の譜面を見て大変なことだとたじろいでしまいました。しかし、やるしかないと自分に言い聞かせて毎日読経のようにくり返していると少しずつ英語になってきました。歌詞もいろいろな解釈の別世界があって新発見でした。

　法喜さんも同行です。色々な事務手続きや支度を整えてくれました。物価が高いのでラーメンなどを買い込みました。時差の表や日程のスケジュール調整、服装、お土産等準備が進みました。

　そういう中で私に課題が与えられて来ました。「マイウエイ」は私の宿業の道という心で歌わせて頂こう。

　そして、もう一つが『浄土論註』の浄土に生れた菩薩の四つの功徳の四番目の実践課題です。

　　十方のあらゆる世界のうちで、三宝（仏・法・僧）の無いところにおいて三宝の大海のごとき功徳をに示現して衆生にらしめるのである。

数年前に、三宝無きところとは先ず私自身の心身であったと知らされた時の驚きと慶びが私にはありました。無三宝の私に生れた信心がアメリカで通用するのか・・・・、マービンさんが先生との食事を設定して下さったので羽田先生の「アメリカで真宗を学ぶ」方丈堂出版を読ませて頂き、普遍の教えである真宗がアメリカでは日本人の民族宗教としての位置付けであると知らされ悲しい気持ちとそのはずだという気持ちにもなりました。だからこそ大石先生にお育て頂いた「願いに生きる」のご本願が伝わるのか。おためし、実践のご縁が来たと思わされたのです。

　そういう中で「浄土の日本から、浄土のアメリカへ行かせて頂く」との声なき声を聞かせて頂き心がスーッとになりました。

サンマティオのお寺でのご法話の初めに皆さんの姿が目に入った瞬間に歌が思わされました。思いもしなかった「海」の歌が無意識にご廻向されました。

海は広いな大きいな、月は昇るし，日は沈む。

海に弥陀の船を浮かばせて、

行ってみたいなピューアランド（浄土）の国

心がいっぺんに同行の皆様と通い合うことができ「マイウエイ」も自然に歌わされました。

日にちが前後しますが、シリコンバレーに近いロスガトスの佐恵子さまのお宅には四泊もお世話になりました。茶室もある立派な邸宅でした。咸臨丸が着いたところにもご案内くださいました。車中での会話です。

「時差ありお疲れでしょう」

「そうでもないです、本願の時間ですから」

「本願の時間って、どんな時間ですか」

「いつでもどこでも、ちょうどよいです」

「ですね、禅の公案のようです」

「如来さまのお答えですね、私も気持ちよく聞かせて頂きました」

車の中で笑いが響きました。

三日目の夕方、法喜さんがスマホを落としたことがわかりません。車の中、カバンの中どこにもありません。「オーマイガッド」ガッドをガールと聞こえたので私は法喜さんに「なぜ、ガールというのか」と聞くと「ガッドは神様のことですよ」と笑われました。

「それならオーマイ、南無阿弥陀仏だろ。いや、オーマイ南無だよ」。響きの良さに、不安がいっぺんに打ち消されました。冷静になって考えると、「お土産を買った店に忘れたのかもしれない」早速、電話するも通じませんでした。翌朝一番に店を訪ねるとスマホが届けられていたのです。オーマイ、南無。

家に帰り、ご主人のジャックさんと二人で、和紙に筆書きをしました。「オーマイ、南無」を数枚書かせて頂き、最後の紙に「浄土のご夫婦」と書くと、下の方に余分な空白が出来たのでジャックさんに筆を渡して何か書くようにうながしました。彼は物おじせず、丸を書き始め途中から波立つように丸にしませんでした。なぜそのような表現をしたのかと聞くと本人も無意識で分からないとのことでした。そのけ、ベニスの部屋にかかっていた月と河に映る波の中の月の絵画が浮かんできました。若い頃、苦悩して、散歩に出かけた時、池に映っている月がさざ波の中で形の無いほどに歪んで見えました。「俺の心の姿だな」とその時、直感させられました。それが伏線と成ったのでしょうか。あのかすかに揺れる月の姿が現れたのではないか。あの空の月と河にされた波の月との関係が二種深信のごとく大事なこと。そうだあの絵画の名前を「トュルームーン（本当の月）」と呼ぼうと思い立ち、朝早速説明をしました。そして絵画の前で四人で記念写真を撮りました。

今もう少し加えさせて頂くと、親鸞さまの『教行信証』の終わりに近いところにあるお教えの中に

　もしこの書を見聞せん者、信順を因としを縁として、を願力にし、妙果を安養にさんと

人間の心には信順したい心と反逆し背いてしまう心とが同居しています。その矛盾に苦悩して人生を狂わす人も少なくないと思わせられます。その矛盾を壊すことなく、ごまかすことなく超えて光明土へ前進する道が浄土真宗の救いの道です。

十日、ニューヨークに移動し、岐阜から森はる美さんが合流されました。名倉さんはコロンビアから帰敬式を済ませて八日に帰られたところでお疲れの中を名所を案内して下さいました。ニューヨークでの五泊もマービンさんが素晴らしい施設を格安にして用意くださいました。最上階の窓からハドソン川が眺められ、朝じっと眺めていると旅の疲れがとられました。ホテルの横には三メートル以上もある親鸞さまのお像がありました。原爆に遇いながら奇蹟的に残った像をアメリカまで運ばれたのです。ひざのあたりなどに被曝して赤く染まったあとがありました。近くの皆様方もよくご存じで散歩中の感じの良い青年が私たちがそこに留まっていることを知らないのか「このホテルはクラシックで素晴らしい」、そして親鸞さまの像の説明までしてくれました。

翌朝の十四日、ゲーリーさん宅での本願道場へ向けて出発。汽車で１時間半くらい、それから車で一時間弱かかります。毎月名倉さんが通われているとのこと、名倉さんとゲーリーさんの熱意を知らされます。駅に着くとゲーリーさんが合掌してお迎えくださいました。途中、中国の仏教寺院に立ち寄りました。広大な敷地と本堂、岐宿舎などその規模の大きさに圧倒されました。ゲーリーさんはそこで十年以上役員をされたとのことです。出家仏教の限界を感じ、親鸞さまのみ教えに遇われ得度され来年三月には教師修練を受けるとのことです。そのご縁で長仁寺の彼岸会にご法話の予定が決まりました。森の中の自宅には静かな仏間があり、入り口の上には本願道場の額がありました。

ゲーリーさんの導師のもと正信偈を堂々と読経されるので驚きました。奥さんも共にドイツ系のアメリカ人です。早速、ご法座が始りました。先生英訳の御文様、一帳目四通の「自問自答」と呼ばれるお文様です。

問うていわく、正定聚と滅度とは、一益とこころうべきか、また二益とこころうべきや。

　　答えていわく、一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つぎに、滅度は浄土にてうべき益にてあるなりとこころうべきなり、されば、二益なりとおもうべきものなり。

　　「十八願の信心は浄土往生、あるいは念仏往生です。浄土に生れる、あるいは浄土を頂くことですから、滅度は浄土にて得る役ですから、十八願の信心を頂いたらこの世で二益を頂けるのです。多くの方々は身が死んでからと解釈しています」

言った私が今までにして来たことを知らされました。蓮如さまは使い分けをなされて正定だ

けを強調しておられたと思い違いをしてきました。大石先生から「信後が大事であると、今日も

今日も浄土の中で浄土へ浄土へと前進していかないと滅度へは行けません。滅度に至ったら自分

の事は用事が無くなって、人の救われることを願って生きるようになるのです」と、利他行、教

化地まで進まないと、教化できるはずはないのです。利他行がおろそかになり、民族宗教になっ

て長い時間がたっているのです。

　大石先生が師の藤解先生に「自分の事ならなんとかなりましょうが、人の助かる事まで願えま

せん」と申し上げた時「そうじゃろうのう、浄土をもらわにゃのう」とぽつりと仰せられたこと

が、今また光と成って私に届けられました。蓮如上人と改めて深い出遇いを頂いたことです。こ

の事はアメリカに来てこそのご廻向でありました。私を含めて皆さんの感動の余韻が続いていま

す。

禅のさとりに一円相というの絵があります。滅度という境地に出てこそ光明の世界、○が輝

きだす事を今知らされます。二河白道も「西の岸に到りて善友あい見て喜ぶ」とあります。到るのであります。到ればったり来たりできます。聞法会の会座も一つの浄土でありましょう。なかなか聞法する人は少ないのであります。

　　アメリカから帰国して、七月の後半は長仁寺皆作法要、長仁寺リモート法座、少年院、親戚の法事、聞光道、ベラルーシ法座、そして新潟県圓性寺、等覚寺本願道場と続きました。第二六願に得金剛身の願があります。以前の私だったならばこんな過密なスケジュールだったなら五分の一の所でへたり込んでいたでしょう。

　　七月最後の日程が二十九日から八月一日にかけて三泊四日のご法縁です。迎える方も林さんご夫妻に幼い子供さん二人そして八十二才の前坊守さんがおられます。ご家族全員での協力が必要です。林康一朗住職の真剣なご姿勢が伝わってきます。この度は一人旅です。最近は宿泊するのはホテルで済ますことが多いのです。迎える方も行く方も気を遣わずに済みます。一日だけでも泊るとなるとお互いに気を遣い大変です。この度は三泊もさせて頂きます。しかし、この度のご縁で業がお互いにさらけ出されるからこそ本願のお育てがあり、信心の深まりがあることが身をもって知らされました。

　　二十九日の夜、子供さんが興奮して泣き出しました。二人とも泣き出し、しばらくそれが続きました。私が小さい頃大泣きしていたことが思い出されました。母が家をよく出ていきましたので、精神的に不安定だったのです。だから強く安心の世界を求めたのです。父はもちでした。だから他人の両親がうらやましい中で育ったのです。親なる世界を求めずにはおれなかったのです。私もその血を引いています。真宗の教えを聞かせて頂き、特に大石先生のお育てを受けるうちにいつの間にか癇癪は消えていきました。魂が満たされて来たからでしょう。林さんが癇癪を起さなければと念じていました。スマートフォンのイヤホンが在ったので、耳栓代わりにしますといつのまにか眠りにつきました。

　　翌朝、大きな目覚まし時計がなったのかと飛び起きました。林さんの癇癪の声でした。林さんは私と顔を合わすのはバツが悪いだろうなと思いつつ、二階の廊下から外を眺めるとアジサイがたくさん咲いています。九州ではとっくに枯葉になっています。不思議だなと眺めていたら不安が消えていました。如来さまがアジサイと成って救ってくれたなと感じつつ、散歩に出ることにしました。林さんとすれ違いに朝のあいさつの後、「目覚まし時計がなって、目が覚めました」というと林さんのニッコリした笑顔がそこにありました。皆あまり寝ていないようです。散歩に出かけアジサイにお礼をして周りを見た時です。「あっ、宿業共感」「宿業共感の大地」というお言葉が感得されました。宿業同士で共感しあっている、一切とつながっている。この世だけでない、無限の時間と無限の空間と一つにつながっている。全ては尊い、ちがったままで輝いている。草は草、同じ名前の草はない、樹は樹、鳥は鳥、たくさんの種類、山川草木、水、石に至るまでみな宿業の中に在り輝いている。母は母、父は父、子供は子供のまま。そのままが宿業と本願の救いの中にいた。『浄土論』の地功徳、水功徳、雨功徳、などなど経典の世界のままに輝いていた。地の底から叫びたいような歓びが湧き出る一瞬でした。色々なことが思い出され、一筋につながって思わされました。

　　若いとき不本意な職場に変わり、やけ酒なども飲み、先生に長い手紙を書きました。数日して、一枚のはがきが届きました。

　　涼しい夏ですね

　　蝉は何の不足も言わず

　　ただ鳴いています

「たったこれだけか」とまた不足が出ました。それから数日して「あ！俺は不足ばかり言っているだけなのか。俺は今、ここに居る。どれだけ不足を言おうと、原因を探そうと何処におるのでもないここにおる」と大地に足が着いたとたんに「よし、今、ここでやろう」という意欲が不思議に沸いてきて「掲示板を数か所作ったり」仏書を読んだりすることになりました。あれが十九願に入れて頂いたことだったのか。ご本願ということはまだ意識に上りませんでしたが新しい世界へ踏み出された時だったのです。

　　清沢先生の「絶対他力の大道」にある

自己とは他なし、絶対無限のにして、にに、この現前の境遇に落在せるもの、即ちこれ成り

地に足が着く。宿業の自覚すなわちご本願の活動が始まる。言葉に血が通うというのか。説明や考えの理解でなく、私において生きてはたらいてきたのです。

『歎異抄』十三章には

「故聖人のおおせには、卯毛羊毛のさきにいる塵ばかりも作る罪の、宿業にあらずというこ　となしとしるべし」とそうらいき。

裏に本願のない宿業は運命論です。本願と一体の宿業は新世界のスタートです。あの時の私がそうだったのです。

そして、アウシュビッツ収容所での女性の言葉が浮かんできました。今改めて本を開き確かめますと次の通りです。

　　この若い女性は自分が近いうちに死ぬであろうことを知っていた。それにもかかわらず、私と語った時、彼女はであった。「私をこんなひどい目に遇わしてくれた運命に対して私は感謝していますわ」と言葉どおりに彼女は私に言った。「なぜかと言いますと、以前のブルジョア的生活で私は甘やかされていましたし、本当に真剣に精神的な望みを追ってはいなかったからですの」その最後の日に彼女は全く内面の世界へと向いていた。「あそこにある樹は一人ぼっちの私のただ一つのお友達ですの」と彼女は言い、バラックの窓の外を指した。外ではカスタニエンの樹がちょうど花盛りであった。病人の寝台の所にかがんで外を見るとバラックの病舎の小さな窓を通してちょうど二つの蝋燭のような花をつけた一本の緑の枝を見ることが出来た「この樹とよくお話をしますの」と彼女は言った。私はちょっとまごついて彼女の言葉の意味がわからなかった。彼女は状態（うわごと）で幻覚を起こしているのだろうか？不思議に思って私は彼女に聞いた「樹はあなたに何か返事をしましたか？」「しましたって！」「では何て樹は言っていたのですか？」彼女は答えた。「あの樹はこう申しましたの。私はここにいるーわたしはーここにーいる。私はいるのだ。永遠のいのちだ・・・。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　「夜と霧」フランクル著作集１・みすず書房刊１７１頁

　長年気になっては遠のいていたあのお言葉がはっきりと私に聞こえて来ました。

　圓性寺さんに帰り林さんに筆と紙、すずりを用意していただき書かせて頂きました。

　　　　　宿業共感の大地

と。三十日は岐阜からお忙しい中を車で森はる美さんが聞法に来られました。アメリカに続い

てです。夕方にはまた帰られます。本願の火が点いたのでしょうか。彼女も真剣です。その日

は宿業共感の大地の世界を聞いていただきました。

三十一日の昼からは法隆光昭さん、渡辺義彦さん、林さんの妻のさん、長女のさん、

君といっしょに曽我量深・平澤興先生の記念館に連れて行ってくださいました。ここでも

深い感動を頂きました。

曽我先生の

　　南無阿弥陀仏に南無するは、我が仏にく事である。

　　仏に往けば仏すでに我に来る。

南無（帰命、弥陀タノム）するところに、仏と我とが感応する

感応すれば仏我を離れず、我仏の中に在り

　　　　　　　　　　　　　　（　）内は筆者　昭和十六年十二月八日　開戦の日とあります。

曽我先生の苦悩の背景が伝わってきました。

大石先生は水中特攻兵器、回天に乗られました。いかに国のために死ぬかという教育を受けて

いたために敗戦の時「いかに生きていくか」ということがわからず悩まれたそうです。教育の

重大さを改めて痛感させられました。

平澤興先生のお言葉では

学問（求道）ははるかに先をゆく人を追いかけるような態度ですべきである。追えども、追えども追いつけず、油断すると見失ってしまうような気持で勉強（聞法）すべきだ。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（　）内は筆者

　すぐに私にとっての大石先生を思わせられました。「よき師に遇えば、道は半分遂げたような

ものですね」「いや、全分です」という大石先生のお教えが、生きて聞こえて来るようでした。

親鸞さまの仰せに信不具足があります。

ただ道ありと信じて、すべて得道の人ありと信ぜざらん、これを名づけて「信不具足」とす、といえり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典２３０頁

　さんが武道でよく言われることとして「三年練習するよりも、三年かけてよき師を探せ」。どの道でも通じていることでありましょう。聞法の姿勢を厳しくお育て下さった大石先生のご恩が年を重ねるごとに深まってきます。

　最後に圓性寺住職の林　康一朗さんからの礼状で終わりたいと思います。私の方がこのようなお手紙を頂いて身が引き締まる思いにさせられました。

前略・・・信心一つの本気の聞法は真剣勝負ということを、先生の姿勢から教えて頂きまし

た。

私は自分で聞いていると思っていて、自分を守ろうとしていただけでした。

曽我先生の記念館で読んだ「」のこと、「人が恐れて行こうともしない国境線のところ

に魚が多くいて、そこを自分は恐れずに超えていく」言われた曽我先生のご心境が、大石先生

が藤解先生に入門するにあたり、今までお世話になった先生に挨拶に行った際、「夫婦で入門

することはおかしい、藤解先生はだ」、と言われても貫き通されたこと、江本先生が大石

先生の教え一つに集中して、マイペースで貫き通されたこと。そして「善導独明仏正意」善導

様が一人『観経』を通して仏様の真の御心をいただかれたことと、同じご心境として、そして

それが信心を求める者の求道の姿勢として教えて頂きました。

私が悩んでいるお聖教の輪読会は今月で辞めようと思います。私が信心の道を歩みたく、

そのために江本先生の教えに集中したく、他に時間がないから、ということを、言い込めようとするのではなく、自分の姿勢として聞いていただこうと思います。

まだ自分の姿勢が定まっていないので、相手が何と言うか恐いです。弥生から全然姿勢が

定まっていないから、変に言い訳に逃げようとするんだと指摘されました。全くその通りです。弥生からのこの言葉が出たことに驚きました。今回の本願道場のご縁で弥生も深まったように感じます。

　　十月の報恩講にもお越しいただき、聞の姿勢を教えていただきたく存じます。

　　お育ての程、今後ともよろしくお願い申し上げます。

私は共に浄土への旅が始ったと頂きました。

令和六年八月十日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝